

財団研究委員による 小学校の鑑賞教育を考える・実践編 1-4

低学年の指導

ふゆのおんがくをたのしもう——アンダーソン『そりすべり』

埼玉県川越市立芳野小学校教諭 粟飯原喜男

冬の因んだ名曲として、『スケーターズ・ワルツ』、『トロイカ』などととも挙げられるのが『そりすべり』。題名のとおり、雪の上を馬や犬、トロイカなどに引かれて走りまわる乗り物を描いています。同名の曲がいくつかあるため、ちょっと混乱してしまいます。長い間親しまれてきたのがモーツァルトの『そりすべり』。《3つのドイツ舞曲》K.605の第3曲で、中間部（トリオ）にポストホルンや鈴などが加わった楽しい描写の部分があります。近年人気のイギリスの作曲家、フレデリック・ディーリアスの『そりすべり』は、1889年に作曲された《2つの小品》の第2曲。こちらはスケールの大きな絵画風の描写が特色で、前奏の鈴の音が雰囲気醸し出しています。

そしてもう1曲、これらに負けない人気を誇っているのが、ルロイ・アンダーソンが1948年に書いた『そりすべり』（Sleigh Ride）です。前二者と比べるとテンポがより軽快で、響きにもジャズ的な要素が随所に加えられ、全曲に流れる鈴や鞭（むち）の音のアクセントが印象的です。

ここではアンダーソンのものを取り上げ、平成13年度音鑑・夏のセミナーのグループ研究から生まれた学習指導案をベースに、一部修正を加えながら実践してきた事例を紹介します。

題材名は

「ふゆのおんがくをたのしもう」

題材の目標は

- 季節を表わした音楽に親しむ
- 情景を想像したり、拍の流れを感じ取って歌ったり聴いたりする

を設定します。

関連の表現教材は、冬を表わした歌曲（『雪のおどり』や『北風ごぞうのかんたろう』）を選択し、指導計画は2時間程度とします。

*

まずは『そりすべり』の最初の投げかけです。

「これから“そり”を表わした音楽を聴きます。みんなはいま、そりに乗っているつもりになってください。そりに乗っていると、前のお馬さんからいろいろな音が聞こえてきます。その音がこれから聴く音楽の中に入っています。」

クラス全員が椅子に座っている状態で、そりに乗っている気分させるのがポイント。聞こえてきた音については、曲を聴き終わってから発表させることを告げます。

聴き終わってから、鈴、馬の足音（ひずめの音）、鞭、馬の鳴き声（いななき）の順に板書。ほぼ全員が擬音、擬声音を

聞き分けることができます。

続いて2回目の聴取。聞こえてきた音が曲のどこで鳴っていたかの確認です。

評価について

ここは、一人ひとりの感じ方の反応を見取っていく大切な場面です。

方法として、聞こえてきた音を数字で表わします(1. 鈴 2. 足音 3. 鞭 4. 鳴き声)。たとえば「鈴」の時は人差し指で「1」のサインを出し、「足音」の時は「2」…というふうにしていきます。そうすることによって、子どもたちの音楽への反応をリアルタイムに評価していくことができます。鈴と足音が同時に鳴っている場面では、すぐに両手でサインを出す機敏な子どもを観察し、そのことに気づかなかった子どもにも曲の流れの中で方法を理解させていくことが必要です。いちばんタイミングの取りにくいのが鞭の音。何とか合わせようと夢中になっている姿がそこそこ見えてきます。

3回目は「自分の気に入った音の一つを選んで、打っているまねをしてみましょ

う」と投げかけます。すると、なぜか男子の大半は鞭と馬の鳴き声を選択します。馬の鳴き声は、そりを引っ張る馬に変わり、5～6人が横一線になって、ヒヒーンと鼻を鳴らしている様子が大変滑稽に見えてきます。とにかく1回聴くごとに活動が異なるのですから、子どもたちのこの曲への興味が尽きることはありません。

授業が終わると、子どもたちはこの曲の主題を口ずさみ、得意の擬音を打つまねをしながら教室を後にします。



ルロイ・アンダーソン『そりすべり』

- ・掲載教科書 教育芸術社1年生、教育出版&東京書籍2年生
- ・今回のねらい 学習指導要領 低学年の内容B鑑賞(1)ーア「楽曲の気分を感じ取って聴くこと」、イ「リズム、旋律及び速さに気をつけて聴くこと」